

# 論文審査の要旨

|   |                                  |     |        |
|---|----------------------------------|-----|--------|
| 報告番号  | 修 第 1303 号                       | 氏 名 | 藤澤 真沙子 |
| 論文審査担当者   | 主 査 三村洋美<br>副 査 梅田 恵<br>副 査 鈴木浩子 |     |        |
| (論文審査の要旨)   |                                  |     |        |
| 学位論文題目 「訪問看護を利用している終末期がん患者の在宅看取りに関連する要因」  |                                  |     |        |
| <p>訪問看護を利用している終末期がんの療養者を対象として、在宅看取りを可能にするためには何が影響しているかを明にした論文である。方法は A 看護ステーションの 2013 年 3 月～2017 年 3 月までの末期がんと診断されて訪問看護を利用した 865 名のデータを対象として分析を行っている。うち在宅看取りは 674 名、病院または施設での看取りは 191 名であった。</p> <p>在宅看取りと有意な関連が認められたものは、就労のない主介護者がいる、ADL の移動、食事、排泄、入浴、着替え、整容で介助を要する、おむつを使用している、寝たきり度が高い、訪問診療を受けている、住まいが戸建てで持ち家であった。さらに、多重ロジスティック回帰分析において在宅看取りへの影響要因は、65 歳以上である (OR=6.2 95%信頼区間 1.9～20.3)、訪問看護利用開始時に入浴の介助が必要である (OR=3.1 95%信頼区間 1.1～8.6)、訪問看護利用開始時に訪問診療を受けている (OR=2.7 95%信頼区間 1.0～7.3)、持家である (OR=4.0 95%信頼区間 1.5～10.7) であった。</p> <p>高齢の療養者で早期から訪問診療をする医師と連携を図り、看取りの準備を行っているものが在宅看取りとなりやすい、持家の方が近隣への遠慮がなく看取りをしやすいと考察されている。</p> <p>本学位論文では、1 つの訪問看護ステーションでの調査であるが、在宅看取りとなった療養者の特性を明確にした。また、訪問看護の導入時には ADL が低下し入浴の介助が必要な状況であることも分かり、終末期がんの療養者の訪問看護は短期間での関わりが行われていることも見出された。</p> <p>さらに国内全体の現状について調査を行う予定であり、本研究の知見の価値は大きい。</p> <p>以上より、藤澤真沙子氏より提出された、学位論文「訪問看護を利用している終末期がん患者の在宅看取りに関連する要因」は修士 (保健医療学) の学位を授与するに値するものであると認める。</p> |                                  |     |        |